

氏名	劉 建 雲
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	学 術
学位授与番号	博甲第2184号
学位授与の日付	平成13年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科産業社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	清末の同文館と東文学堂に関する研究 - 中国における日本語教育史の視点から -
論文審査委員	教授 石田 米子 教授 倉池 克直 教授 佐藤 智水 教授 辻 星児 東京大学名誉教授 小島 晋治

### 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中国で最初に本格的な日本語教育を実施した清代の官辦外国語学校である同文館、及び清末中国人の本国における日本語教育の場として簇生したさまざまな東文学堂を研究対象とするものである。近代日中関係史の中でも人的交流が最も盛んで、日中間に文化的な対等性ある相互利用と提携がなおりえたこの時代の日本語教育の場の成立とその背景を考察し、そこで行われた日本語教育の内容について検討することにより、中国における日本語教育の草創期の実態の解明を試みている。従来の清末日本語教育史研究では、日本における留学生に対する日本語教育と本土における日本語教育にその研究対象が分けられ、本土における日本語教育の研究の主流は、台湾、満州国などの植民地及び後の占領地における日本語教育を主として日本の対華教育工作の視点から研究するものであったが、本論文はこれらの先行研究を踏まえつつ、それが見落としてきた清末中国人の日本語学習の動機の主体性、及び直接教育に携わった日本人教師の実践を重視し、この視点から研究するものである。研究方法は、この視点から明治期の雑誌や教団刊行物及び中国の雑誌に散在する関連記事、外交史料館所蔵の関連史料、関係者の文集・伝記等を広く調査し、さらに当時教育に携わった学校管理者や日本語教師が残した公開・非公開の一次資料を掘り起こし、丹念に集めたこれらの史料により明らかにしえた個別の事実関係を示しつつ、これによって草創期の日本語教育の全体像とその時代の特徴の解明に迫るといふ、徹底した実証的手法である。

論文の構成は、序章、本体となる5つの章、及び終章から成り、A4判1440字詰本文153頁、注36頁、付表16頁、総205頁である。以下、各章の要旨を示す。

#### 序章 本論文の課題と構成

問題の所在として、中国人に対する日本語教育の先行研究に対し、中国で続けられてきた一般の外国語教育としての日本語教育を明確に研究対象としてとらえる必要性を指摘し、史料収集の困難もあってほとんど未解明のままである清末中国の草創期の日本語教育の実

態を明らかにするという本論文の課題を設定する。この課題のもとに、論文が研究対象とする清末の同文館及びさまざまな東文学堂（日本語学校）に関する先行研究を検討、その問題点を指摘し、日本語を学習する主体の要求及び現場教育者の教育実践に即して日本語教育の実態を迫るという本論文の視点を明示し、論文の構成を示している。

### 第1章 中国人の日本語への関心——清末にいたる日本語研究の蓄積

中国人の日本語研究・日本語学習は、西洋諸言語についてのそれとは異なり、近代に発生したものではなく、日本語には長い観察・認識・研究の積み重ねの歴史があった。この章では近代中国で本格的な日本語教育が始まる以前の中国人による日本語認識・日本語研究の蓄積を概観し、清末の日本語学習・教育への継承性・不連続性について論じている。

### 第2章 清代の同文館と日本語教育

この章では中国人の日本語学習を明清両代の四夷館・会同館におけるそれから説き起こし、第二次アヘン戦争後の国際関係の中で成立した同文館において、日本語教育がいつどのような背景のもとで本格的に始まり、ここにおいてどのような教育が行われていたのかを新たに集めた史料に基づき考察している。

### 第3章 清末に簇生した東文学堂

第3章と次の第4章は、清末中国人の本国における日本語学習の場として中心的役割を果たした東文学堂の実態を解明している部分である。甲午戦争（日清戦争）敗北以後、同文館で本格的に始まった日本語教育は、戊戌維新以後の新しい気運の中で数多くの東文学堂の出現というかたちを伴って急速に広がるが、先行研究において多く言及されながら実は誤った認識や未解明の部分が多かったこの東文学堂について、その設立・運営主体、教育目標、教育内容等の多様な実態を、入手可能なかぎりの史料を広く集めて解明し、考察している。第3章では従来曖昧に使われてきた「東文学堂」の概念を明示した上で先行研究の批判的検討を行い、設立・運営のパターンを中国人設立・日本人設立・日中共同設立の3種に分け、それぞれの特徴や創立から閉鎖または改組までの展開の事実関係を考証し、背景にある多くの勢力・団体及び国際関係を視野に取り込みつつその意味を論じている。

### 第4章 東文学堂の実態とその背景

本章では第3章で取り上げた東文学堂から、代表的な事例を取り出し、設立動機、資金管理、学校運営、教育目標、教育内容などを史料を踏まえてさらに具体的に検討し、時代の動きの中での東文学堂の諸相、日本人関与の実態、東文学堂が清末の風気開発や近代教育に果たした役割等を明かにし、東文学堂の多面的な実態について論じている。

### 第5章 清末における日本語教育の実践

本章では清末中国人の日本語学習の目的、草創期の日本語教師がかかえた課題とそれぞれの実践、時代の特徴を持つ教授法を取り上げている。教育者の教育現場での実践にはどのような工夫があったのかについて、ほとんど材料が残されていない中から見出した史料をもとにその再現を試み、この教育実践には中国人の学習主体の需要にどのように対応しようとするものがあり、また今日の中国人対象の日本語教育の理論や方法に照らして見る時どのような知見を見出しうるのかを論じている。

## 終章 結論と課題

終章では、本論文が明らかにしえた点を4つの側面から整理し、結論として以下の4点を提示している。第一に、近代以前の中国人の日本語研究の蓄積、19世紀末の黄遵憲の日本語研究を考察し、その蓄積性と戊戌維新後の日本語研究・学習への連続性について否定的見解ないしは疑問を提示した。第二に、中国における本格的な日本語教育は、1897年3月、京師・広州2同文館から始まったという事実を本研究が明らかにし、同文館での日本語教育の開始は日中の文化的関係の逆転の認知を意味するものであり、ここから東文学堂の出現への道が開かれたとした。第三に、東文学堂の設立・運営に関与した勢力・団体と個人の多様性、設立された地域の特徴、関与した日中双方の勢力・団体・個人の活躍・衝突・協力など、先行研究が一般的に言及してきたようには単純でない実態を解明し、とりわけ東本願寺、東亜同文会、台湾総督府などの日本側関与の実態について多くの新しい事実を具体的に明かにした。日本側関与の背後に国策の意図を読み取りつつ、同時に日本人教師の努力が日中文化交流の基盤に残した足跡を評価し、また東文学堂の近代学校教育の先駆としての意味も評価している。第四に、草創期の日本語教師が直面した困難な課題と工夫を明らかにし、中でも広州同文館教師長谷川雄太郎の教授法の先駆性を評価した。また、当時の和文漢読法、漢文訓読法の流行の実態とその背景を明らかにし、その清末という時代の中での意味を評価した。

今後の課題としては、本論文が対象とした時期以後、日中関係の悪化の過程の中で中国本土における日本語教育はいかに続けられて行ったのか、草創期の日本語教育は日本の勢力範囲や占領地で行われた日本語教育とどのようにつながっていたのかが残されているとしている。

## 論文審査結果の要旨

学位審査会は2001年2月1日に行われた。審査委員は学内委員4名・招聘委員1名の5委員である。最初に学位申請者から学位申請論文の要旨、及び本論文が明らかにしえた成果と残された課題について報告させ、その後各審査委員による質疑と申請者の回答がなされた。公開審査の傍聴者と申請者の間の質疑応答もあった。

公開審査会終了後、5名の審査委員による審査を行なった。審査結果は以下の通りである。

積極的に評価できる点は主として以下のとおりである。

第一に課題の設定と視点の独自性と意義である。先行研究においてほとんどその実態が解明されていなかった中国本土における草創期の日本語教育を研究対象として取り上げた課題の設定、及び中国における日本語教育の歴史を学習主体の動機・要求の視点からとらえ、教育の現場でどのような教育実践があったのかに注目し、その視点から日本語教育が行われた場とそこにおける教育内容を考察しようとした研究の視点は、独自性があるとともに今後の研究の展開可能性を期待させるものであり、その意義は十分評価できる。

第二に本研究成果の研究史上の意義である。清末中国の日本語教育の実態の研究はこれ

までほとんど未開拓であったが、精力的な史料収集と丹念な実証によって、これまでの先行研究において一般的に言及されるのみで曖昧であったか、あるいは誤解されてきた問題を丁寧に確認しつつ訂正し、多くの個別の事実関係を初めて明らかにすることで同文館と東文学堂の具体的な多様なありかたを示し、この時期の中国における日本語教育の実態の研究の大きな空白部分を埋めた。それにより、今後の清末日本語教育史研究は本論文の研究成果の上にか成り立ち得ないという研究史上の基礎を築いた。日本、中国のいずれの学界に対しても新たな知見を加える貴重な学術論文であり、研究史上の意義は十分認められる。

質疑においては活発な議論が行われ、今後の研究に向けての助言ともなった。史料の収集の困難により残されている問題点のほか、考察・評価に関して指摘された問題点と課題は主として以下の諸点である。

結論の第一点にかかわることでは、明清両代における日本語研究の蓄積性、近代以前の日本語研究・日本語教育と同文館以後の日本語教育の場におけるそれとの継承性と不連続性の結論にはなお検討すべき課題がある。この部分に関しては、日本における日本語史の研究の成果の踏まえ方の問題も指摘されたが、同時に、日本人と中国人のコミュニケーションを成り立たせる場についてもっと広い視野で考察する課題も今後はあり、日本語史の資料となる材料のみでなく、商人・漂流民なども視野に入れ、その影響を考えていく必要があるとの指摘もあった。第二、三点にかかわることでは、学習者の動機・要求からの視点は意義があるが、多様であったと考えられる学習者の姿がもっと明確に見えるとよかった、彼らのその後についての追跡調査はできないのかとの指摘もあり、本論文では史料の制約で部分的にしか解明できなかったこの問題は残された。第四点に関しては、長谷川の教授法についてGDMに近い方法も工夫されたと本論文が評価していることについて、集めた材料から想定しうる教授法をただちに今日のGDMと結び付けて論じることに疑問が出された。

審査委員会は、本論文には以上示したようななお検討を要する問題点や今後に残された課題はあるが、それは本論文の成果を損なうものではなく、総合的に判断して本論文が博士の学位論文として十分その水準にあるものと評価し、学位論文として認定することに全員一致で合意した。